

11. 環境教育と食育

—「保育5領域の環境領域」と「栄養学」との取り組みから—

千田 眞喜子^{1*}

岸本 清明¹

¹花園大学社会福祉学部児童福祉学科（〒604-8456 京都府京都市中京区西ノ京壺ノ内町8-1）

* E-mail: m-senda@hanazono.ac.jp

農作物栽培活動と農作物観察活動に着目し、保育5領域の環境領域と栄養学の視点から環境教育と食育について検討した。6種類の農作物の名前の正答率は高く、これは大学入学までの栽培経験によると考えられる。栽培活動を通じて農作物への愛着及び命の大切さを理解できるようになっている。また、農作物の食育への利用としては「食材に興味を持つこと」、「農作物を調理して食べること」、「好き嫌いをなくすこと」に関する回答が多くみられる。

Key Words : *child care, crops cultivation, environmental education, kindergarten education, text mining*

1. はじめに

地球環境と食は密接な関係がある。大気環境も水環境も土壌環境も汚染されていない安全な環境でないと安全な食材が生産されない。ここでは農作物栽培活動と農作物観察活動に着目し、保育5領域の環境領域と栄養学の視点から環境教育と食育について検討する。

(1) 環境教育の重要性について

笹川（2018）¹⁾は、子どもに環境にかかわる力がなぜ必要かについては次に示すようにまとめている。

- 1) 日本では、2005～2014年までの10年間を「国連持続可能な開発のための教育の10年」とした。一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で、生きていることを認識し、行動を変革することが必要である（そのための教育を「持続可能な開発のための教育（ESD, Education for Sustainable Development）」と呼んでいる）²⁾。
- 2) 2006年に60年ぶりに改正された教育基本法で、これから子どもを教育する指針として、学習指導要領に「持続可能な社会」という文言が盛り込まれた³⁾。
- 3) 21世紀に生きる子どもたちに環境や自然と人間とのかかわり、環境問題と社会経済システムの

在り方や生活様式とのかかわりなどについて理解を深めさせ、環境の保全やよりよい環境の創造のために主体的に行動する実践的な態度や資質、能力を育成することが求められている⁴⁾。

- 4) 豊かな自然や身近な地域の中での様々な体験活動を通して、自然に対する豊かな感受性や生命を尊重する精神、環境に対する関心等を培うことが必要である⁴⁾。
- 5) 「持続可能な社会」を達成するために全ての人がもたなければならない倫理的思考の素地となる「感性」は、家庭や幼児教育の現場で培われるものである。
- 6) 子どもが環境にかかわる力を育てるということは、子どもが科学的なものの見方・考え方を習得するための素地としての「感性」を育てることになる。
- 7) 現在、人類は、地球生態系の一員として他の生物と共存しており、生物を食料、医療、化学などに幅広く利用しており、他の生物種の存在なくしては、人類の存続はあり得ない状況である。

以上のように、子どもの環境にかかわる力の養成のために、環境教育は重要である。